



いけばな修行

日本IR協議会
専務理事

佐藤 淑子

長年続けていることのひとつに「いけばな」がある。母親が池坊いけばなの先生で、子どもの頃から教室についていき、気が付いたらずいぶんな年月が経っていた。とはいえ受験や仕事で忙しく、あまりできなかった時期もあったと思う。それが母親の病気によって弟子を引き継ぐことになり、この数年、改めて「修行」に勤しんでいる。

いけばなというと、「難しそう」というイメージを持つ人も多いのではないか。たしかに何百年も引き継がれた教えが基本にあり、私自身、「お稽古」が気づまりだったときもある。しかし新しい形も導入されており、初心者向けのテキストも整っている。脳科学者の茂木健一郎氏によると、いけばなは「美しい花にふれる」「手先を動かす」「枝を切るなどの『決断』をする」という3点で脳によい効果をもたらすという。

そんなわけで、教室では楽しく学べるよう工夫しているのだが、指導する側は楽しんでばかりもいられない。しっかりした基礎固めはもちろん、常に新しい動きを取り入れる必要がある。「正解」のない世界だから、答えは自分で見つけるしかなく、修行の当初は母親から何度も「ダメ出し」をされ、心が折れそうになった。いまの先生も、私が「なんでもおっしゃってください」とお願いしたせいか、いきなり難しい課題を投げけてくることもある。けれども、指導のもとに何回もやり直し

たり、自分ひとりで複雑な作品をいけたりすると、少し上に進んでいるのがわかる。

いけばな修行の渦中で思いだしたのは、20年

ほど前、日本経済新聞の「経済教室」欄でIR（投資家向け広報）をテーマに毎日30回の連載記事を書いたことである。その時も「本当にやる（できる）のか」といぶかりつつも指導してくれた上司がいて、何度も議論し、書き直ししながら筆を進めた。手が痛くなるほどキーボードをたたき、目がしょぼついて画面も読めなくなったが、連載は好評で、1冊の本にもまとめることができた。その後も何回か連載記事を完結できたのは、このときの経験があったからだと思う。

正直言って、修行はつらい。やりたくないと思うこともしばしばである。だが、その先にある世界を思えば、重たい腰も上がる。個人的なことで恐縮だが、母親を支える力にもなったようだ。考えてみれば、人生は修行の連続のようなもの。これからも気力・体力を維持し、チャレンジを続けていきたい。

